

# ヘイトスピーチに抗して

—ドレフュス事件後のアナトール・ルロワ＝ボリュウの弁論—



ドレフュス事件を契機としてフランス社会の政治的・宗教的な分断が深まる二〇世紀初頭、フランスの知識人アナトール・ルロワ＝ボリュウ（1842-1912）は、ユダヤ人とプロテスタントに対するヘイトスピーチを告発し、スケープゴートを作り出すメカニズムを解明した。この講演ではルロワ＝ボリュウのテキストを繙き、当時のユダヤ人やプロテスタントに対するヘイトスピーチと、現代フランスに蔓延するユダヤ人やムスリムに対するヘイトスピーチの共通点を探る。

主催：「西洋社会における世俗の変容と「宗教的なもの」の再構成—学際的比較研究」（代表：伊達聖伸）  
共催：東京大学東アジア藝文書院（EAA）

« Résister aux discours de haine : le plaidoyer de Anatole Leroy-Beaulieu au lendemain de l’Affaire Dreyfus en France (1902) »

2024年2月20日(火) 17:00～19:00

日本語解説付 事前予約不要

東京大学駒場キャンパス(対面のみ)

101号館11号室EAAセミナールーム

講演者 Valentine Zuber

ヴァレンティーンヌ・ズベール

フランス高等研究実習院(EPHE)教授

宗教学者。フランスのライシテ、人権、宗教的マイノリティに関する著作多数。主著に『人権の宗教的起源』(未邦訳;2017年)、『論争の中のライシテ』(未邦訳;2017年)、『忘れられた憎悪』(未邦訳;J.ポベロと共著;2000年)。邦訳に「フランスにおけるライシテとイスラーム——近世から現代まで」(田中浩喜訳、伊達聖伸編『フランスのイスラーム/日本のイスラーム』水声社、2023年)。

司会者 Date Kiyonobu

伊達 聖伸

東京大学総合文化研究科教授

宗教学者。フランスのライシテに関する著作多数。主著に『ライシテから読む現代フランス』(岩波新書、2018年)、『ライシテ、道徳、宗教学』(勁草書房、2010年)。

コメンテーター Kenji Kanno

菅野 賢治

東京理科大学教授

フランス語ならびにユダヤ研究者。フランスとヨーロッパのユダヤに関する論考多数。主著に『ドレフュス事件のなかの科学』(青土社、2002年)、『フランス・ユダヤの歴史』(上下巻、慶應義塾大学出版会、2016年)、『「命のヴィザ」の考古学』(共和国、2023年)。